

MfG_J_Metaphors_in_Kina-Saffron_Shu_buildings
禅宗寺院と茶室・露地も比喻のひとつ

1. いろいろな見方
2. 禅宗寺院と茶室・露地も比喻のひとつ
3. 禅宗の庭園、茶室のイメージ

参考 *1 機那サフラン酒本舗の饅絵の紹介

参考 *2 庭園と離れに込めた思い

1. いろいろな見方

機那サフラン酒本舗の建物、庭園は、いろいろな見方ができるように思います。そう思わざるを得ないような「理由」が、随所に隠されていて、それを探していくのも、サフラン酒の屋敷、建物、庭園を楽しむ方法のひとつと考えています。

| 意味 | 理由 | 参考 |
|-------------------------------------|--|----|
| 饅絵蔵 | | *1 |
| 龍、東西南北の守護神、十二支は、地域の安寧、商売繁盛、子孫繁栄への祈り | 一見、いないような動物も、東西南北の守護神をはじめ神様に転身することで、十二の動物の全てが揃い、季節がととのうことで五穀豊穡にもつながる。 東面の軒下、窓飾りの饅絵の計五枚は、これしかないという配置の妙である。 | |
| 衣装蔵と饅絵蔵 | | |
| 東西南北の守護神である幼い四神の成長に託した、守護神への誓い | 衣装蔵の鯉、小鳥を、将来の成長した青龍、朱雀と見立てることにより、当初より、将来の東西南北の守護神の完備する饅絵蔵の建造を目指していたと考えることができる。 | |

| 意味 | 理由 | 参考 |
|-----------------------------------|---|----|
| 庭と離れ | | |
| 巨石・名石、巨木・名木と加工は、自然のパワーに託した、招福と魔除け | 大量の溶岩や名石の庭園、池の龍、幅の広い檜の一枚板を並べた廊下や屋久杉の二間続きの竿縁天井の広間、龍や宝珠、揺るぎなき守護者の不動明王、そして窓ガラスの四隅に千五百を超える「猪の目」の細工など、招福と魔除けの数々である。 | *2 |
| 主屋、庭と離れ | | |
| 禅寺と茶室・露地の心象を入れ込み、心の安寧を求めた | 庭に配置された多くの大きな踏み石は、実は、門(正門)から茶室(離れ)に誘う露地であり、夜の茶会に訪れる客の足元を照らす多くの灯籠、床の間の床天井には茶室によく使われる網代天井、その他、露地・茶室・禅宗寺院を想起させる工夫。 | *3 |

いずれにせよ、人々の守り神である龍、登り龍と下り龍が、屋敷全体を通しての基調テーマであり、全ては、自家、そして顧客や取引先を含む関係者、更に近隣の摂田屋に生きる民衆への、心の安寧、日々を生きる拠り所となるような、祈りの空間を作り上げることにあったのではないかと、思われるのです。

参考

- *1 仁太郎ワールド MfG_J_intro_Kina-saffron-Shu_brewery.pdf
- *2 サフラン酒の庭園と離れ MfG_J_saffron_annex_japanese_garden.pdf
- *3 もうひとつの解釈 MfG_E_Metaphors_in_Kina-Saffron-Shu_buildings.pdf

十二宮(Zodiac)と十二支の共通点

登り龍と下り龍は薬師如来の定番の荘厳であり、薬師如来は別名に医王とあるように、薬種業を意識した設えではないか。

補足 龍について

仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようで、かつて機那サフラン酒の屋敷には、龍が38匹も、いたそうです。もともと火防の意味もあるのですが、その龍が多くいるわけには、魚沼の西福寺開山堂の石川雲蝶作による「道元禅師猛虎調伏の図」を繰り返し見たという仁太郎や後に鰻絵を製作する伊吉の体験が、もとになっているという見方もあります。

構図を決めて名人・雲蝶に彫刻絵画の装飾を施させたのが、幕末当時の西福寺方丈、大龍和尚です。和尚は、前住職の志、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという願いを引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じ、この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えて、雲蝶さんに託したといえます。

仁太郎の鰻絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者もおられます(*1)。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという、強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を、屋敷内のあちことに配置したのは、という側に立ちたいと思います。

(*1) 建築史がご専門の、藤森照信先生、“建築探偵神出鬼没”,朝日新聞社(1990)

2. 禅宗寺院と茶室・露地も比喻のひとつ

サフラン酒の庭園・離れの、もうひとつの解釈

庭園と離れについて、今まで、「巨石・銘石、巨木・銘木、巧みな設えによる招福、魔除け」という解釈をしてきたのですが、もうひとつの解釈として、禅宗寺院と茶室、そこに至る露地という考えも成り立つのではないかと、気づきました。

構成要素を列記しますと、次のようになり、その意図があったと考えざるを得ません。

(1) 主屋

おびただしい龍 仏法の守護神 (※ 補足参照)

火灯窓 (華頭窓、架灯窓) 窓で禅宗寺院を想起させたと考えられる

(2) 庭園

露地 多くの踏み石 ~ 踏み石にしては大きい、庭の大きさに合わせたと考え、合点がいく。

多くの灯籠 夜の茶会のため、足元やつくばいを照らす。

溶岩の築山 山中の自然のなかにいるような、雰囲気醸し出す。

特に、夕刻から夜、そして早朝までの間は、深山幽谷。

不動明王 国家安穩、万民豊樂の誓願を意味し、龍の化身とされる。

(3) 玄関先

つくばい 身体を清める水手洗(みたらし) である。弥彦神社の御手洗川も、

連子窓 門の柵が連子である。 神様の自然のつくばい。

雲形に似せた彫り物 寺で時を知らせに打ち鳴らす、青銅や鉄製のもの。

(4) 一階

廊下の天井 桐でふく

一階の各部屋の書や絵画 床の間に飾られた掛け軸を意図。

龍の屏風 法堂の天井の龍を思わせる、いいお顔。

石禅の書 新井石禅師は、長岡にも縁のある、曹洞宗の高僧。

(5) 二階

最初の部屋は広茶室風の、対面の間。

網代天井 茶室風の部屋に見立てた。

床窓(とこまど) 床の間の横壁の組子障子で、ガラスは外窓を意図。

格天井 折上格天井であるが、格天井も茶室に用いられる。

二階の大広間 主客室であるが、庭園もみえる方丈をも意識している。

二階の廊下

手摺りの雲のたなびき 宝珠を得ようとする登り龍と下り龍

二階廊下の宝珠 如意宝珠

※ 補足 仏法の守護神

大乘仏教で権威ある教典のひとつとされる法華経の序品に、「八大龍王」というのが出てくるそうです。

天竜八部衆に所属する竜族の八体の竜王(竜神)のことで、仏法を守護するとされていますが、日本では“祈雨・止雨の神”ともされています。

一方で、龍神は洪水を起こす悪ともされていますが、坐禅をする僧侶の不可思議な力により龍神が仏教に帰依したという話から、禅と龍神信仰という民衆信仰が結びついたという説もあります。

0. はじめに にも書きましたが、龍は菩薩のようなものです。

大乘仏教の教義の一つに

『上求菩提(じょうぐぼだい) 下化衆生(げけしゅじょう)』と言うものがあり、さまざまな解釈がありますが、おおよその意味は、上求菩提(悟りを求め修行に励むこと) は昇り龍に相当し、下化衆生(命あるもの全てに悟りを説くこと) は降り龍に相当するとされています。

阿弥陀仏の「回向」、無量寿経の「往相還相」に当たるものとも云えます。「往相還相」も、『上求菩提下化衆生』という民衆の救済の具体化であり、仏法の守護神、さらに人々の幸を祈る守護神としての龍のはたらきが、得心できます。

この龍への思いこそが、吉沢仁太郎ワールドの原点かも知れません。そう考えると、このサフラン酒の鰻絵蔵、庭園と離れの、ちょっと風変わりな荘厳も、陰陽五行説を中心とする儒教思想、茶室・庭園に具体化した大乘仏教の世界のひとつと捉える、仁太郎さん独自の解釈とみても、不自然ではないのです。

サフラン酒施設のほぼ全体の建造を指揮した初代仁太郎は、たまたま庭仕事をしたときの傷がもとで急死しましたが、もう少し長く生きたら、次は何を形にしたか、教えてほしかったと思います。

3. 禅宗の庭園、茶室のイメージ

あるとき、サフラン酒の庭園が、鷺巣の定正院のお庭の雰囲気似ていることに、はっと気づきました。

定正院は、ここからほど近い、曹洞宗の寺院で吉澤家の菩提寺です。

方丈の前の主庭は典型的な日本庭園の様相なのですが、その奥の広大な庭は、なだらかな山もあり、御不動様や石仏も随所にあり、一般的な寺院の庭園と異なった風景です。

サフラン酒の離れの二階廊下の手すりには、薬師如来を荘厳する設えと解釈できる、宝珠や雲形ではないかと思えるものもあります。

どこがどうとは、まだ、云えませんが、何かがありそうです。

参考 *1 機那サフラン酒本舗の鰻絵の紹介 20201023改訂 春日

(吉澤仁太郎の世界、「仁太郎ワールド」の もうひとつの解釈)

みなさん、長岡市摂田屋にあります、機那サフラン酒本舗の鰻絵の豪華さを、お聞きになった方もおられると思います。もしかしたら、薬用酒の製造販売で財をなした金持ちのゴテゴテ趣味、なんていうコメントを見かけた方も、おられるのではないのでしょうか。でも、単なる成金趣味とみると、そこに潜む、見落としてしまうものがあるかも知れません。今日は、そんなお話をします。

見学に来られるゲストは、だいたい、門の入り口の正面の鰻絵蔵の鰻絵、そして主屋を見物の後、案内のスタッフについて、奥に広がる賓客接待専用で作られた庭園、離れを見学されます。もちろん、この順で回っても、その素晴らしさを充分ご覧いただけるのですが、それだけですと、創業者の吉澤仁太郎の、家運隆昌を祈った想いに気づかれないように思います。40年近くに渡る施設建設の順番に着目すると、仁太郎の「別の」想いが、みえてくる気がするのです。

その1 主屋建造、増築当時 [明治27年(1894)、大正2年(1913)] (写真A)

鬼瓦に据えた龍に託した「守護神、火防」が中心で、その龍に招福の霊力も期待しました。

その2 最初の鰻絵の蔵、衣装蔵建造当時 [大正5年(1916)]

鬼瓦に龍、そして、八枚の鰻絵には、東面に鯉の滝登りと鳥、北面に玄武と白虎を配しました。鰻絵蔵のような、四霊獣(青龍、白虎、朱雀、玄武)をもって東西南北の守護神とする考え方が、既に、しっかりと現れています。はじめて作った鰻絵の一部に、あえて、将来の龍を予見させる滝を昇る鯉、そして明日の鳳凰を思わせる小鳥を配したところに、まだ五十代、もっと商売を伸ばすんだ、いま見ている、という気持ちが見え隠れします。そして次の蔵の建造も、鰻絵の図柄も、このとき既に決めていた、飛躍への覚悟としか、思えないのです。

その3 鰻絵蔵建造当時、大正5年起工から大正15年(1926)竣工の間 (写真B、C)

摂田屋で商いを始めてから二十年あまり、順調に家業が延びてきたことへの感謝と、更なる繁栄を祈念する気持ちから、五行思想にもとづく東西南北の四霊獣、めでたい四瑞獣(応龍、麒麟、鳳凰、霊亀)、そして穀物の十二カ月で五穀豊穡を暗示する十二支を配そうとしたと考えられます。すなわち、龍とその他のメンバーで、地域安寧、五穀豊穡、商売繁盛、子孫繁栄を念じ、さらに土蔵の入口部分では、商売繁盛と人間の徳の二つを暗示する聖人、更にめでたい鶴亀で招福と長寿を願ったのです。まさに守護神、招福、魔除けを、蔵の四方と内外を飾る鰻絵に込めたと云えると思います。そして、それらは、見ている人々にも、注がれるのです。

その4 離れ、庭園建造 [昭和6年(1931)] 写真D、E、F (庭園、離れの龍、猪の目)

家業が繁栄してきました。今後も末永く続き、守っていききたいという祈りからと思いますが、庭園では巨石、銘石のもつパワー、とりわけ浅間山の溶岩の持つ火山の膨大なエネルギーに、そして離れでは巨木、銘木のもつパワーと細工の巧妙さに、それぞれ魔除けと招福を託したのでは、と見てとれます。離れのガラス窓の猪の目、庭園の不動明王をはじめ、随所に魔除けや龍に絡めた祈りと感謝が溢れ、それらは全て、まず最初に、お客様に振り向けられています。

このように、サフラン酒の敷地は、地域安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りに満ちた空間なのです。また、鰻絵蔵の内外の鰻絵、軒下の1枚を含め計18枚の配置も、絶妙なんです。地・水・火・風・空の五大思想に、四霊獣、四瑞獣の五行思想とを併せて考えると、東面の鰻絵の配置は、この配置しかないという、実に見事な、絶妙の対応・配置であることに、気づかされます。会心の配置に、「どうらね、わかったかね。」と云わんばかりの仁太郎さんの笑顔が、みえてくるような気がするのですが、如何でしょうか。



写真 A



写真 B



写真 C



写真 D



写真 E



写真 F



補足 龍について

仁太郎は、龍に特別な想いを持っていたようで、かつて機那サフラン酒の屋敷には、龍が38匹も、いたそうです。もともと火防の意味もあるのですが、その龍が多くいるわけには、魚沼の西福寺開山堂の石川雲蝶作による「道元禅師猛虎調伏の図」を繰り返し見たという仁太郎や後に鰻絵を製作する伊吉の体験が、もとになっているという見方もあります。

構図を決めて名人・雲蝶に彫刻絵画の装飾を施させたのが、幕末当時の西福寺方丈、大龍和尚です。和尚は、前住職の志、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという願いを引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じ、この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えて、雲蝶さんに託したといひます。

仁太郎の鰻絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者もおられます(*1)。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという、強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を、屋敷内のあちこちに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。

(*1) 建築史がご専門の、藤森照信先生、“建築探偵神出鬼没”,朝日新聞社(1990)

補足 申について

『ここには、サルはおりません。縁起の悪い「去る」に通じるからです。』という人もおりますが、私は、サルは、いるという側に立ちたいと思います。

十二支のものは、穀物の十二カ月の種蒔きから生長、開花、結実、収穫を意味するとされ、1つ欠けても、毎年続く五穀豊穡のサイクルができません。ですから、この鰻絵蔵の十二支も、全て揃っている筈と思うのです。まして、サフラン酒にご来店され、鰻絵をご覧になるお客様の中には申年生まれの方もおられるでしょう。お客様を大事に思う仁太郎さんが、そのような、お客様をションボリさせることを、する訳がないのです。では、辰、巳、そして申は、どこにいらっしゃるのでしょうか。でも仁太郎さんは、これについて、何も残していません。仁太郎さんの謎かけでは、と思っています。もしかしたら、私は、有力な答えを見つけたかも知れません。

既に訪問された方も、そんな見方で、もう一度ご覧になっていただき、招福、魔除けの祈りを味わっていただきたいのです。

参考 *2 庭園と離れに込めた想い

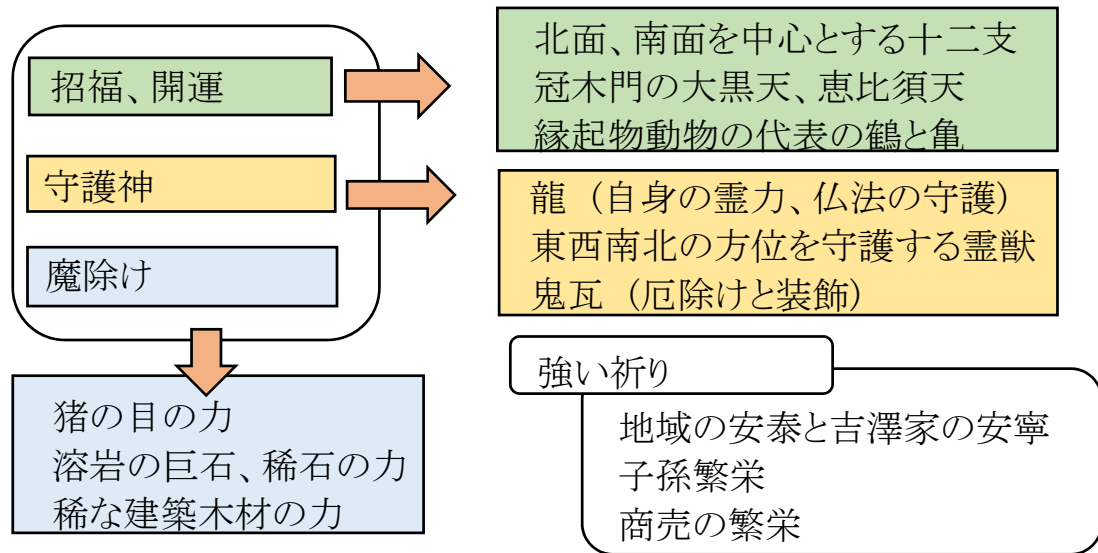
「仁太郎ワールド」の形成

(C) Kasuga 20201103改訂

シンボルの絵解き

敷地内を、ありとあらゆる招福と魔除けのシンボルで埋め尽くす・・・

敷地内を、招福、守護神、魔除けのありとあらゆるシンボルで埋め尽くし、地域の安泰と吉澤家の安寧、子孫繁栄、商売の繁栄・永続を祈った。それが「仁太郎ワールド」。



シンボルの一例

龍のもつ力を信じた仁太郎は、鯉、石や木の自然力、不動明王にも、相通じる力、招福・守護・魔除けの力を感じ、これらのシンボルで埋め尽くした。(1) 鯉は、登竜門ということばがあるように、龍になる。清い流れの川にも、よどんだ池にも棲むことから、いかなる艱難辛苦にも耐える強く勇気のある魚のシンボルとされる。

その由来は、後漢書にある「黄河の登竜の伝説」として知られる。

(2) 溶岩の築山、パワーストーンにもなる稀石の巨石など、自然石が有する偉大な力、巨木や稀な木々が有する霊力、守護の力とともに、自然界のもつパワーの溢れる庭園、建築物になっている。

(3) 庭園の池の奥、そして鰻絵蔵のコレクション室に、除災招福、悪魔退散の力をもつ不動明王がある。龍神は、不動明王の化身とされる。

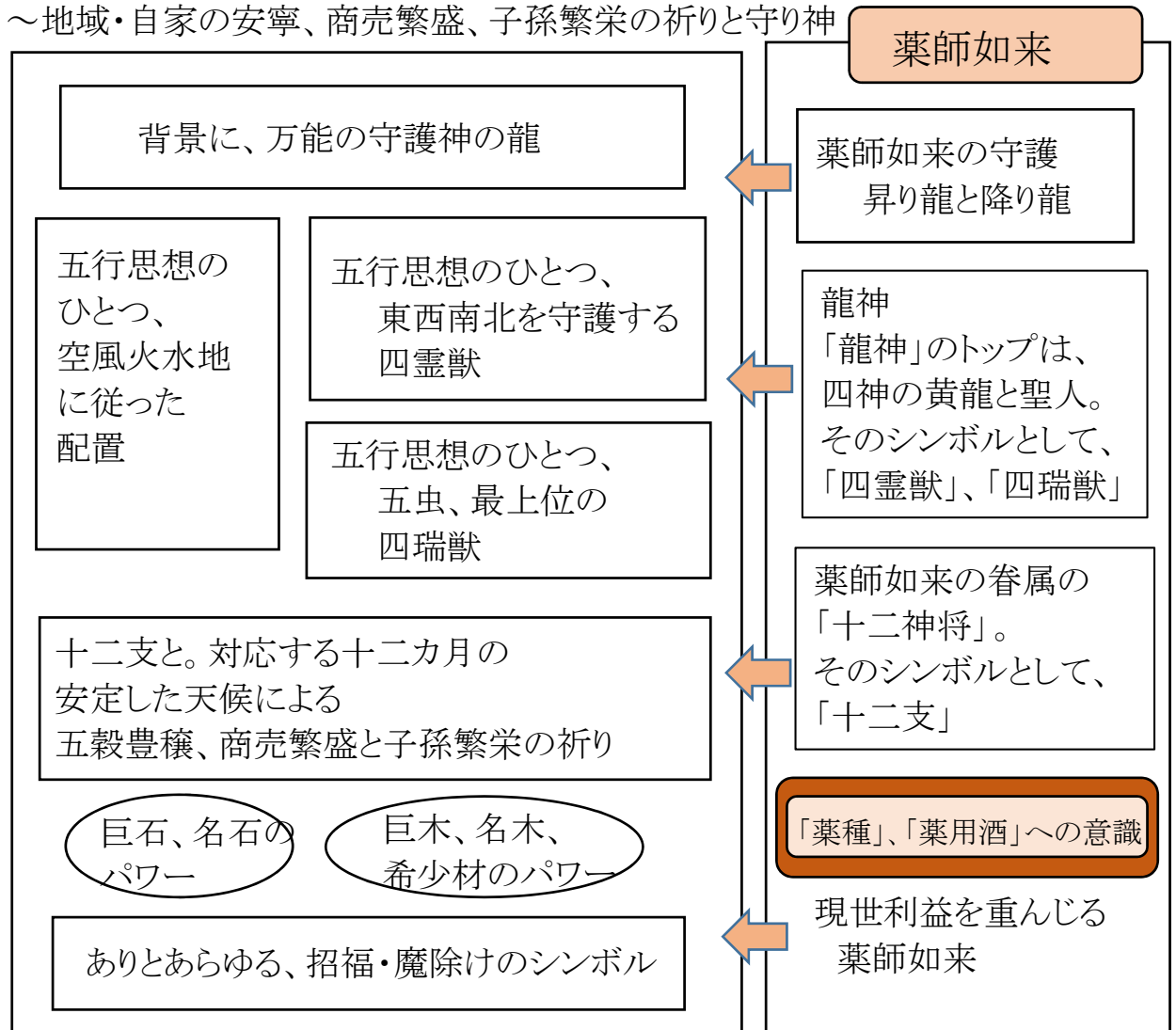
| Facility | 龍 | 鯉 | 巨石、稀希材木 | 不動明王 |
|------------|---|-----|---------|------|
| 鰻絵蔵の軒下 | ○ | | | |
| 鰻絵蔵の東面の鬼瓦 | ○ | | | |
| 衣装蔵 | ○ | ○ | | |
| 庭園 | ○ | (○) | ○ | ○ |
| 接待用別邸 (離れ) | ○ | | ○ | |
| 鰻絵蔵コレクション室 | ○ | ○ | | ○ |

龍の霊力が守ってくれる

仁太郎ワールドの「祈りの構造」の予想図

機那サフラン酒本舗の敷地にあふれる「祈り」の構造

～地域・自家の安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りと守り神



東面は、東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武いう、方角の守護神としての四霊獣を表わすと見えています。また、古代中国では、生き物を鱗、毛、羽、甲の四類に分類し、四つのそれぞれを統括する長(王)の、応龍・麒麟・鳳凰・亀という四霊獣のグループもあります。このように龍は、東西南北の四霊獣の龍、五虫の最上位の四瑞獣の龍、十二支の辰、そして火防の守護神、仏教守護の龍と、全部を兼ねた中心なのです。

北面、南面を中心とし、その進化・転換によるものを含めた十二支も揃い、五穀豊穰、商売繁盛と子孫繁栄の祈りと、それを見る人へのご利益です。そして、これらを、若いころの薬種商への奉公、そして薬用酒への進出と奮闘で、ずっと心に秘め続けた「薬種」、「薬師如来」の具体化と捉えることも、無理ではないかも知れません。